

令和元年6月26日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26770243

研究課題名(和文)近世～現代のタイ族移民ネットワークとアイデンティティ

研究課題名(英文) Tai Migrant Networks and Their Identity from the Early Modern Era to the Present

研究代表者

岡田 雅志 (Okada, Masashi)

京都大学・東南アジア地域研究研究所・研究員

研究者番号：30638656

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、文献調査と臨地調査の双方に軸足を置くことにより、世界各地に離散するタイ族の移住史の再構築を行い、タイ族のネットワーク化の動きとそれに伴うアイデンティティの変容を明らかにすることを目的として実施した。ベトナム、タイ、フランスの各地文書館での史料調査と、アメリカ、フランスのタイ族難民コミュニティでのインタビュー調査、SNS上のコミュニケーション観察の結果に基づき、タイ族の移住の歴史を再構成を行った上で、サイバースペースでのアイデンティティ再編などグローバル化をもたらしたタイ族のネットワーク形成とアイデンティティの実相を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、グローバル化に伴う人の移動の活発化をもたらすアイデンティティの変容と地域社会との調和などの現代的課題にも貢献しているものである。その意味で、タイ族という個別集団の問題にかぎらず、東南アジア史やグローバルヒストリーを含む、より広域な歴史領域に対して大きなインパクトを持つとともに、特に現在、今後人の移動と流動性がさらに増すであろうグローバル時代に対応した多民族・多文化共生のあり方や歴史認識をいかに共有するかを探る上で、本研究の成果は重要な示唆を与えるものである。

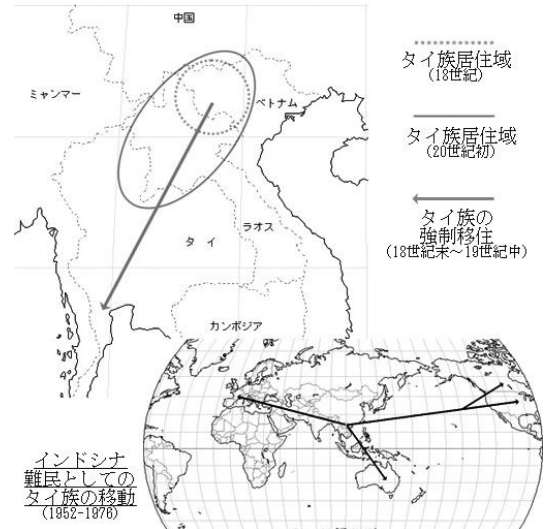
研究成果の概要(英文)： By setting a pivoting foot to the both sides of document and field survey, this research aims to reconstruct the history of a transmigration of the Tai people dispersed globally, and also aims at clarifying their movement of networking, and the transformation of their identity accompanying the networking. As a result, I reconstructed migration history of Tai people and clarified the real aspects of their identity reconstruction through both their daily practice and the cyberspace in process by documents survey (Vietnam, Thailand and France), observation survey (Facebook, Youtube) and interview survey at Tai refugee communities (U.S. and France).

研究分野：東南アジア史

キーワード：タイ族 移住 アイデンティティ インドシナ 難民 メディア 越境 山地民

## 1. 研究開始当初の背景

タイ族は、主な居住地のベトナム西北地方のほか、ラオス、タイといった周辺諸国のみならず、インドシナ難民としてフランス、アメリカなど世界各地にコミュニティを形成し、グローバル・ディアスポラというべき状況を出している(右図参照)。そのコミュニティ間には、元来の人的結合に加え、近年ではインターネットを通じて世界的なネットワーク形成の動きが見られる。こうしたネットワーク形成の動態の解明は、タイ族という集団のみならず、グローバル化時代のエスニシティのありようの理解にも資するものであるが、これまでのタイ族研究は、特定地域のタイ族を中心とした個別研究か、B.サムズのような各地域のタイ族集団間の比較研究(Bert F. Sams, "Black Tai and Lao Song Dam," *Journal of the Siam Society* 76, 1988)にとどまり、そのネットワーク全体を扱うことはなかった。人類学を中心に国家、地域の枠を越えた複数地調査(multi-site research)が市民権を得つつあるものの、東南アジア研究では、言語の壁に加えて、近代国民国家の領域別に編制される認識枠組みに基づく特定地域の個別研究が依然として主流であり続けていることが一つの原因である。こうした状況を打破するためには、前近代から現代までの通時的な視野の下、タイ族の移動をとらえた上で近代の特殊性及び前後の連続性を評価する必要であり、また、そうした視角からのアプローチにより、タイ族の移動とネットワーク形成の動きは、近代の国民国家体制への移行の裏で進んだ社会流動化の一局面としても捉えることも可能となり、より普遍性を有する課題となると考えた。



## 2. 研究の目的

本研究では、1で述べた学術的背景に基づき、世界各地に離散するタイ族の移住史の再構築を行い、タイ族のネットワーク化の動きとそれに伴うアイデンティティの変容を明らかにすることを目的とした。具体的には、近世期の東南アジア大陸部の域内における自由移動・戦争捕虜としての強制移住から、20世紀におけるインドシナ難民としてのグローバルな拡散に至るまでを移住史の対象とし、ラオス・タイ・アメリカ・フランス各地の移民コミュニティに加え、現在進行中のサイバースペース上でのタイ族の再ネットワーク化の動態を明らかにすることで研究の開始時点で、タイに連れて来られたタイ族強制移住者の子孫とされる集団(タイソンダム)の調査にはすでに着手しており、本研究計画においては、そのフォローアップ調査を行いつつ、新たにアメリカ・フランスのタイ族難民コミュニティを調査対象とし、移住元であるベトナムのタイ族社会についても、タイ族ネットワークのグローバル化がいかなる影響を与えたかについて調査することとした。

## 3. 研究の方法

近世から現在を通時的に考察するため、本研究では、歴史学の記述分析アプローチと人類学の内在的アプローチを組み合わせる手法を採用することとした。1で述べたような本来あるべき研究視角が実際の成果として形をなさなかったもう一つの理由は、同時代証言が得られない前近代については、一次史料の分析から出発する歴史学の記述分析アプローチが、近代以降は、オーラルヒストリー、つまり研究対象の認識を重視する人類学のアプローチがそれぞれ中心的な役割を担うという、ディシプリンの差異とその分析対象のずれが放置されてきた問題である。申請者はこれまで、歴史学に軸足を置きながら、タイ族集団を中心とする地域ネットワーク形成を近世以降の中国~大陸東南アジア北部というマクロ地域の動態の中に位置づけ分析する一方で、各地域のタイ族集団のアイデンティティや、それを支える歴史意識についても調査を行ってきた。それにより得られた経験及び学術成果に基づき、両者のアプローチの接合を試みることにした。具体的には下記の通り、臨地調査と文献調査を平行する形で調査・分析を進めた。

### (1) タイ族移住史の再構成

タイ族の移住史構築において、申請者がこれまで対象としていた時間的射程は、主に植民地化以前、19世紀半ばまでであったが、それには史料的制約があったことが大きい。19世紀末以降のタイ族居住地域の状況を知るには仏領インドシナ政府の行政文書が第一級の史料となるが、インドシナ戦争後、ベトナムから撤退したフランスは一部を残して文書を本国に持ち帰ってしまった。そのため、植民地期についての本格的な研究にはフランスでの史料調査も不可欠

となる。エクサンプロヴァンスの海外文書センター( Centre des Archives d'Outre-Mer )には、貴重なタイ文字文書を含む植民地時代の文書史料が保存されている。ここでの史料調査により、申請者がこれまでベトナムやタイの文書館で収集してきた同時期の文書と照らし合わせることが可能となり、それに基づき植民地期のタイ族社会の動向及びネットワークの動態を明らかにすると想定した。また、実際の移住経験世代が生存しているアメリカ、フランスの難民コミュニティで聞き取り調査によるライフヒストリーを収集・分析することとした。

## (2) タイ族のネットワーク化とアイデンティティ再編

タイのタイソンダム集落での調査(特に移住の記憶をととどめたブック・ターンと呼ばれる葬送儀礼に関わる文書群の収集)に加え、タイ族の難民コミュニティがあるフランス及びアメリカにおいて、対面インタビュー調査を実施するとともに、随時行うソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)などサイバースペース上での情報発信及び共有の状況を調査することで、民族アイデンティティとネットワークに基づく文化的リソースのフローとの関係を明らかにすることを目指した。

## 4. 研究成果

以上の研究目的・方法の下で明らかになった内容及び成果については下記の通りである。

### (1) タイ族移住史の再構成

#### ベトナムからタイへの強制移住

18世紀末から19世紀にかけて数次にわたって行われたシャム王国軍によるタイ族の強制移住の歴史については、タイ・バンコク国立公文書館のバイブック文書をはじめとする公文書類や、ベトナム西北地方に派遣されたシャムの将帥スラサックモントリーの伝記史料などの精査により、強制移住は、従来言われてきたディエンピエンフー(タイ族の呼び名ではムオン・ターン)地域からだけでなく、より南方のタインホア・ゲアン地方を中心に複数地域において行われており、強制移住された人々の中には、同じタイ系であっても異なる複数の集団が含まれていたことが明らかになった。このことはタイで現在タイソンダムと呼ばれ単一のエスニシティを形成している集団が実際には複数の起源を持っていることを意味する。

#### 強制移住以外の東南アジア域内での移動

フランス海外文書センター及びベトナム・ハノイ国家第一公文書館所蔵のトンキン理事長官府、ラオカイ理事長官府、ホアピン理事長官府の各植民地行政文書群や、タイ・ラオスの現地調査で入手した資料から、の強制移住が行なわれていたのと同時期にベトナム西北地方からラオス北部、タイ東北部にかけてタイ族の移動・移住が活発化していたことが明らかになった。その背景には、中国からの移民(匪賊集団も含む)の増大に伴う現地社会の流動化や、それに対応する形での現地政権の国境管理・辺境住民対策の強化が要因としてあることが推測される。

#### 難民としてのグローバルな移動

フランス・アルル及びアイオワ・デモインのタイ族難民コミュニティでの聞き取り調査及びタイのジャーナリストの記録から、ディエンピエンフーの戦い以降、一部のタイ族が難民化し、ベトナム戦争終了後に西側諸国に移住してゆく過程がかなり詳細に明らかとなった。特にこれまで、難民として西側諸国に移住した人々は反ベトミン、反共産主義者というイメージが強かったのに対して、実際には、故地を追われたタイ族の中に、いわゆる親フランス派とされた首長層だけでなく、フランスに徴用された一般兵士が多く含まれていたことが分かったことは重要である。

### (2) タイ族のネットワーク化とアイデンティティ再編

#### 移住記憶のアイデンティティ・リソースとしての利用実態の解明

タイ・ナコンパトム県ドントゥム集落において、タイ族の移住伝承及び葬送儀礼文書(ブックターン)を収集し、その分析から、現在のタイソンダム移住社会において、アイデンティティ形成において儀礼を通じた移住記憶の想起が重要な役割を果たしていることがわかった。また、前述のように、タイソンダム集団は、複数地域の異なる集団に起源を持つが、タイの国民化政策や、冷戦構造下で故地を追われたタイ族難民の姿がマスメディアで強調される中で、かつて同じように意に反して故郷を追われた自分達の移住の歴史と重ね合わせる形でタイ族の子孫という言説が強化されていったことが明らかになった。

他方、アイオワ・デモインでの聞き取り調査の結果からは、故地を離れてからのラオスでの約20年間の生活、ベトナム戦争終了後、タイ側に逃れ難民キャンプで共同生活をした経験の共有が彼らのアイデンティティ形成に大きな影響を与えていることがわかった。

#### サイバースペースを介したアイデンティティ再編

Facebook、Youtube、Instagramなどの各種SNSを主な調査対象とし、アメリカ、フランス、タイなどの空間的に拡散したタイ族コミュニティの間で、これらのSNSを用いながらいかなるネットワーク形成及びアイデンティティの再構築が行われているかについて検証した。その結果、SNS利用者からの過去の記録写真の提供及びそれについての議論などを通じて、各地のコミュニティ間で、移住を含む民族の歴史記憶の再定義が行われている状況が明らかとなった。また、SNSを通じたベトナムのタイ族訪問ツアーが企画され、多数の人々が訪れることに

よって、サイバー空間と物理空間におけるネットワークがリンクし、今までサイバー空間におけるタイ族ネットワークへの参加度が低かった移住元のベトナムのタイ族がネットワーク化の動きに加わるようになるなど新たな現象が起きていることも確認することができた。このことを受けて、タイ族の故地でタイ族の魂が天に昇る場所とされるベトナム・イエンバイ省ギアロにおいて、海外からのタイ族観光客の動向と、住民との間でいかなる交流がなされているかについて調査を実施した。

### (3) 今後の課題

(1) で述べた通り 18 世紀以降の中国からの新しい集団の流入・定着過程が、現地社会の流動化を促進しており、広域的な人口の流動性とタイ族社会の流動性が一体の現象であることが明らかになった。今後は、こうした流動化が周辺国家による国境形成の動きにどのように作用し、この時期に地域を越えて居住域を広げたタイ族の移動やアイデンティティ形成にどのような影響を与えたかを明らかにする必要があるだろう。

また、(2) で述べた現在のタイ族難民コミュニティの事例のように、移住経験の共有がアイデンティティ形成に重要な影響を与えていることが明らかになったが、移民 2 世以降のアイデンティティ形成と移住記憶の問題については十分に調査できなかった。彼らは SNS を通じたアイデンティティ再編の中心となる層でもあり、定住歴の長いタイのタイソンダム事例とも比較しながら研究を進める必要がある。

## 5 . 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 3 件)

岡田 雅志、山に生える銃：ベトナム北部山地から見る火器の世界史、グローバルヒストリーと戦争（秋田茂・桃木至朗編）、大阪大学出版会、2015、165-190

岡田 雅志、近世ベトナム国家の異民族観の変容と越境者：内なる化外たる農人をめぐって、待兼山論叢（史学篇） 査読無、50、2016、1-42  
<http://hdl.handle.net/11094/70028>

岡田 雅志、世紀転換期のインドシナ北部山地経済と内陸開港地：「華人の世紀」との連続性に注目して、「大分岐」を超えて：アジアからみた 19 世紀論再考（秋田茂編）、ミネルヴァ書房、2018、247-272

### 〔学会発表〕(計 12 件)

岡田 雅志、ベトナム肉桂の生産・流通の社会史：グローバル商品化と生産地社会、東南アジアの自然と農業研究会 第 165 回例会、2014/4、京都大学（京都市）

OKADA Masashi、Socio-economic Dynamics in the Mountainous Region of Northern Indochina Peninsula during the period between 1880s and 1910s, The Third Congress of the Asian Association of World Historians、2015/5、Nanyang Technological University (Singapore)

OKADA Masashi、Hinterland of the Maritime/Inland Ports: Socio-economic Dynamics in the Mountainous Region of Northern Indochina Peninsula during the Period between 1880s and 1910s, The 8th Indo-Japanese Workshop、2016/1、Jawahar Lal Nehru University (New Delhi)

岡田 雅志、ベトナム北部山地の首長権力と鉱産資源：18-19 世紀のトゥロン鉱山における銅生産と流通を中心に、東南アジア学会第 95 回大会研究大会、2016/6、大阪大学（大阪府豊中市）

OKADA Masashi、Survival Strategies of an Inland Port Polity: The Politics and the Trade of Muang Theng (Muang Thanh) in the 18th and 19th Centuries, The 5th International Conference on Lao Studies、2016/7、Thammasat University (Bangkok)

OKADA Masashi、Tracking Routes to Heaven: Diaspora and Re-imagined Ethnicity of Tai Dam, Zomia Study Group 21st Meeting, Special International Workshop on Historical Development of the Plains and Hills Bordering Southwest China and Southeast Asia、2017/1、Kyoto University (Kyoto) 【招待講演】

OKADA Masashi、Highlanders' Network in the Early Modern Sino-Vietnamese Borderlands: New Aspects of Southeast Asian Upland History、Global Nodes, Networks, Orders: Three Global History Workshops on Transformative Connectivity、2017/4、Leiden University (Leiden)

OKADA Masashi、The Link between Global Market Change and Local Strategy: the case of Vietnamese Cinnamon in the 18th and 19th Century、Osaka-NTU Global History Workshop (66th Global History Seminar) "Changing Dynamics and Mechanisms of Maritime Asia in Comparative Perspectives"、2018/1、Osaka University (Toyonaka)

OKADA Masashi、Souls Go back to Heaven or Homeland? : Trans-bordering and Re-Imagined Ethnicity of Tai Dam in Global Context、The 11th Annual Nordic NIAS Council Conference, Asia on the Move、2018/11、UiT (Tromsø)

OKADA Masashi、A Historical Approach to Revalue Local Natural Resource: The Case of Vietnamese Cinnamon、The 42th Southeast Asia Seminar "Health and Rural Development Based on the Concept of Gross National Happiness"、2018/12、Royal University of Bhutan (Thimphu)

岡田 雅志、近世亞洲海域「哥倫布交換 (Columbian Exchange)」: 越南肉桂與日本徳川時期藥用植物資源進口的替代嘗試、國際學術工作研討會「海洋亞洲的生活與移居」、国立台湾大学(台北)

OKADA Masashi、Local Strategy, State Policy and Global Market Change: the Case of Vietnamese Cinnamon during from 18th to early 20th Centuries、The 4th Congress of the Asian Association of World Historians "Creating World Histories from Asian Perspectives"、2019/1、Osaka University (Osaka)

〔図書〕(計 1 件)

岡田 雅志、風響社、越境するアイデンティティ : 黒タイの移住の記憶をめぐって、2014、52

〔産業財産権〕  
出願状況 (計 0 件)

名称 :  
発明者 :  
権利者 :  
種類 :  
番号 :  
出願年 :  
国内外の別 :

取得状況 (計 0 件)

名称 :  
発明者 :  
権利者 :  
種類 :  
番号 :  
取得年 :  
国内外の別 :

〔その他〕  
ホームページ等 なし

## 6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名 :

ローマ字氏名 :

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者 なし

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。